アシェンが体を伏せ、片手で右の乳房をまさぐりながら、左の乳首を吸ってきた。若い乳房は感じやすくて、チュウチュウと音をたてて吸われると、せつない痛さの陶酔が、乳首から身体へとひろがっていく。たちまち息が弾みだす。

「あ、んっ……はぁん……んっんっ……」

フローラの乳房につまっているのは母乳だったが、エリシアの胸乳につまっているのは官能と愛情だった。乳首に吸いついておっぱいを吸うアシェンの行為は、エリシアから性的な興奮と彼への愛しさを引きだしていく。

「はぁ、んっんっ……あぁっ……アシェン、はぁあん……痛いわ……」

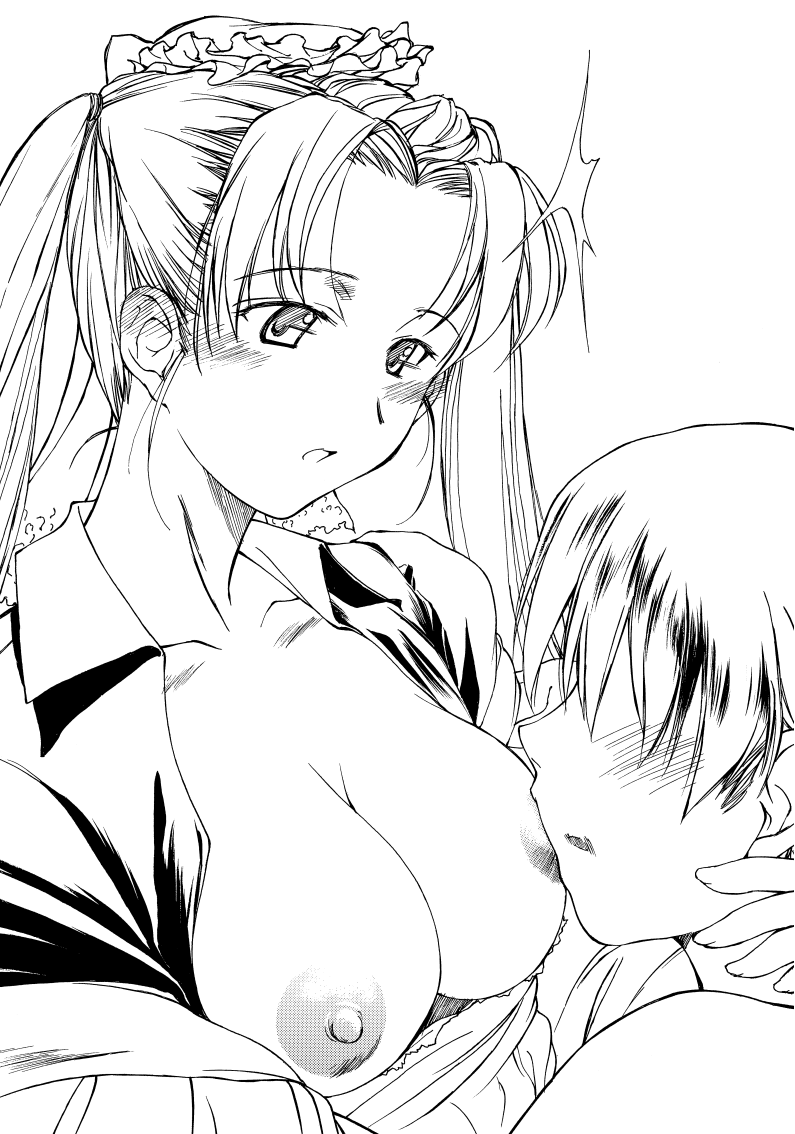
おっぱいをいじられると痛いし、吸われるのも苦痛だ。なのに、いやな痛さではなかった。その苦痛さえも少年に対する恋情に変わっていく。

子宮が疼いてたまらない。彼女は膣をうごめかすと、ずっと感じている架空のペニスをきゅるきゅると締めあげた。粘度のある愛液がドロッと落ち、スキャンティの裏地を濡らす。

「あ、今、匂い、変わった」

「やだ、匂いなんてわかるの?」

「わかるよ。エリシアが興奮してるの。肌も熱くなってるし」



「乳首を吸うと、おっぱいの味がするの？」
「しないよ。エリシアの味だけ」
「私の味ってどんなの？」
「可愛くて綺麗ですてきな味さ」
おしゃべりな唇を、アシェンの唇がふさぐ。歯を割って入りこんだ舌が口腔をねぶり、歯の裏を舐める。キスはすぐに深くなり、舌を絡め合い、唾液をやりとりする濃厚なものに変わっていく。
「甘いよ。エリシアのキス」
「うん。そうね。私もアシェンとキスするの、すごく好き」
――キスがいちばん気持ちがいい……。
キスは痛くないし、身体が溶ける気がする。秘部にペニスを入れるのも、おっぱいを吸われるのも、揉まれるのもどこか痛い。好きでなければ、できない行為だ。
――え？　私、アシェンが好きなわけ？　この二つ年下の、私がいじめてた男の子を……。
エリシアの恋人はアリスロンド国の王様になる。未来の女王であるエリシアが、勝手に男性を好きになることなど許されない。

――違うわ。この子、頼りないから、ほうっておけないだけよ。アシェンなんか好きじゃないわ。

「僕はエリシアが好きだよ。エリシアは僕を好き？」

ご主人様がエリシアの瞳を覗きこむようにして聞いた。すがりついてくる真摯（しんし）な瞳が子犬のように見えてしまう。

――可愛い。なんて可愛いの。アシェン……。

「そ、そうね。私は君が好きよ」

腕を伸ばし、アシェンの頭をナデナデする。アシェンが安堵（あんど）したように笑った。

少年は、エリシアの乳首を舌先で転がしたり、ちゅっと強く吸いつくことを繰りかえす。つるんとした顔をしているアシェンなのに、ひげ剃りあとのザラザラが乳房の内側の敏感なところに当たってゾクゾクする。

「はぁあん……んっ……アシェン、んっ……ぁあぁ……」

世話係のメイドはご主人様の頭を二の腕で抱え、くなくなと顔を振った。

乳房の奥の芯が張りつめて、ただでさえ大きい乳房がひとまわり大きくふくらんでいく。乳首もビンビンに硬くなり、雪白のふくらみの上でグミのように赤く硬く実っている。

腰の横に、勃起したペニスが当たっていることに気がついた。

――アシェン、興奮してるんだわ。よかった……。

安堵と満足感がじわじわと押し寄せてくる。身体を重ねているのだから、アシェンには自分だけを見てほしい。他の女性のことなんか考えないでほしい。なのに、フローラを意識するあまり、皮肉な質問が出てしまう。

「おっぱい、おいしい？」

「うん。おいしい。エリシアの乳首だからね」

「母乳が出なくてごめんね」

アシェンが「え？」というような顔をした。エリシアらしくもない殊勝なセリフだと思っているのだろう。少年は、エリシアの鼻の頭を指先でちょんとつついて少し笑うと、胸の谷間に顔を埋めて左右に振った。

「きゃっ、だ、だめよっ。くすぐったい……」

エリシアの胸乳は大きいのに、胸の谷間はあばらが浮いてごつごつしている。そのごつごつを舌先でなぞるように舐めあげられると、くすぐったいようなせつないような戦慄が背中を滑りあがっていく。

「や、やだっ、やだってばっ、アシェンッ。ゾクゾクするの！」